

## 海運業界の女性たちを祝福

こちらは、英文記事「[Celebrating women in our maritime community](#)」（2019年9月26日付）の和訳です。

**I WAS SAILING  
ONBOARD SHIPS  
BEFORE I COULD  
WALK ...**

**... AND DREAMT OF  
BECOMING A SEA  
CAPTAIN ...**



今日は国連の「世界海事デー」です。今年のテーマは「海運業界における女性の地位の向上」です。そこで、船上や陸上の海事関連業界で働く女性たちの成功を称え、皆様にご紹介したいと思います。

私は歩けるようになる前から船で海を渡っていました。父は私が生まれた年に船長に任命され、生後半年に満たない私は、カナダからフィリピンに穀物を運ぶ積荷船に乗り、両親と共に航海していました。成長の過程で、学校に通い、大学生になるまで、私は長い間ずっと父のような船長になることを夢見て船上で時を過ごしました。しかし、私には手本となる人物がいませんでした。女性船長は存在せず、女性の乗組員や水先案内人、港湾労働者もいませんでした。海運事務所で働く女性すらいなかったのです。私はインドで育ち、女性が海で働くという考えを持つことすら許されていませんでした。そのため、私は法律を通じて、海運業界に進むことにしたのです。

ケイト・マッキュー船長は自身の Instagram フィードで、彼女が船長だと知って驚く人々を前に大喜びしたり、人々の反応を撮影したり、ありのままの自分をさらけ出したりして、パイプをくわえ、髭をたくわえた皺くちゃのお爺さんが窓から外に身を乗り出しているという船長のイメージを見事に吹き飛ばしています。そんな姿を見ていると、私は船長であり、女性でいるということは、トーストに

アボカドを乗せて食べるのと同じくらい簡単なことなのだという気持ちになり、とても嬉しくなります。

ケイト・マッキュー船長は、女優のサンドラ・ブロックを彷彿とさせる上品で魅力的な船長です。ですが、彼女は映画のアクションではなく実際に船を動かしています。ケイト・マッキュー氏はソーシャルメディアと従来のメディアの両方を器用に使いこなしています。Instagram アカウントに 83,000 人のフォロワーを持ち、自分の Instagram アカウント (Bug Naked) を持つエルフ・スフィンクス猫と一緒にクルーズしています。

マッキュー船長は 2015 年に船長に任命され、スウェーデンのカリン・スタレー・ジャンソン氏 (ロイヤル・カリビアン社、2007 年からメガクルーズ船の船長) に続き、メガクルーズ船を指揮する初の米国人女性船長となりました。様々なメディア記事やインタビューで、マッキュー船長は船内での性別の多様性について話し、性別の多様性が「生産性と創造性の向上」をもたらすと述べています。また、ジェンダーギャップが減少することを自身が望んでいることを伝えています。マッキュー船長によると、セレブリティクルーズ社の船上で勤務する女性の数は 3% から 22% に増加しているとのことです。

セレブリティクルーズ社は Gard のメンバーです。そのため、広く捉えてマッキュー船長も、「Gard ファミリー」の一員であると考えたいと思います。

Gard 内にも女性船員に関する物語があります。その中の 1 人が、ベルゲンにある Gard の海事クレームチームのクレームアジャスターであり、1983 年から 1994 年まで海上勤務についていたマリット・ビョルネトゥーン氏です。彼女は、自分が船上では珍しい存在であることを楽しんでいたことを振り返りつつ、彼女に敬意を持って接してくれた皆のことを思い出しながら、マリンエンジニアだった頃の話をおもしろく語るのです。彼女の海洋でのキャリアは妊娠で終わりを告げました。というのも、当時は産休の取得が容易ではなかったためです。船上での仕事が続けられなかったことを惜しみつつ、彼女は陸上で勤務するという選択に満足しており、エンジニアとして冒険していた時分を振り返ってくれました。



航海していた頃のマリット・ビョルネトゥーン氏と現在の同氏。

彼女は今、陸上で勤務しています（Gardで働いています）。しかし、彼女とほんの2分間言葉を交わすだけで、体は陸にあっても、彼女の心はまだ海にあることが分かります。

モニカ・レマヒッチ氏はオーストラリアのドックマスターです。3年前にプロジェクト管理の担当に異動する前は、オーストラリアで最年少かつ唯一の女性ドックマスターでした。彼女が造船工学を選択したのは偶然のことでした。ドックでしばらく働くかたわら勉学を重ね、ドックマスターの実技試験で97%を取得した彼女は、すぐに雇われることになりました。大勢の人々が、女性が復元力計算をこなすことやドックマスターになることは不可能だと考えていました。7年超にわたり、彼女は自分の能力を実証し、彼女と彼女の能力は人々の知るところとなりました。ドックマスターとしての能力を証明することは終わりなき仕事であり、インタビューで私に話してくれた時も、彼女はまだまだかかしい気持ちを抱えていました。彼女は、自分が勤める会社の主要人物による支援が不可欠だったと語り、彼らの支援がなければ、「平等の実現には全員の関与が必要である」と言われるように、ここまでやってくることはできなかつたと断言しています。

ジェシカ・タイソン船長は、英国のブリッジウォーター港で副港長兼水先案内人を務めています。彼女は18年を海洋で過ごし、約14年前に船長になりましたが、双子を妊娠した時期に船を下りました。彼女は、頑固な機関長のことを始め、船上での自覚なきいじめ行為、正しい考えを持っていても間違った管理スキルを持っている船長たち、一部の文化や乗組員が持つ女性蔑視について話してくれました。現在、彼女は海事大学数校で定期的に講演を行い、若い船員たちを指導しています。タイソン船長は、海洋で過ごすには精神的強さと高い対人スキルが必要になると言います。というのも、海洋での生活は、脱出手段がほとんどない小さな島での生活とよく似ているからです。乗組員は、乗組員仲間を尊重する必要があります。というのも、危機的状況が発生した場合、自分の命が他の乗組員に懸かっている場合があるからです。



ジェシカ・タイソン船長

タイソン船長と会話をすれば、彼女が船上での生活を恋しがっていることは明らかです。男性と女性には違いがあり、その違いは祝福すべきものだとしてタイソン船長は話します。両者の違いに良い悪いはなく、価値判断を持ち込む必要はありません。海洋での人生は素晴らしいものであり、素晴らしい機会をもたらしてくれます。

日々の仕事の中で、業務を即座に終わらせたい時、彼女は自分のことをキャプテン・タイソンと呼びます。彼女が言うには、自分をキャプテンと呼んだ時の方がミス・ジェシカと呼ぶよりも良い反応を得ることが多いとのこと。そうであればこの手を使わない理由はありません。なぜなら、彼女は本物のキャプテンなのですから！

クレア・ウォーマーズリー氏は、ロンドンの法律事務所 **HFW** のシニアアソシエイトで、マスター・マリナー（船長）を務めています。私との電話インタビューの中で彼女のこれまでの道のりを教えてくれました。彼女の姉妹は二人とも海の仕事に就きました。1人は海軍に入隊し、もう1人は **BP** に入社しました。彼女は **13** 歳の時に姉から海運業に進むよう促されました。その時、彼女は会話を逸らすために自分は **P&O** クルーズでなければ海には行かないと姉に言いました。**19** 歳になり、将来のキャリアについて何らかの決断を下す必要があった頃、壁に貼られた **P&O** の広告が彼女の目にとまりました。**P&O** が求人広告を出していたのです。「それは運命でした」と彼女は言います。



海上勤務時のクレア・ウォーマーズリー氏

就職しようとする時にただ履歴書だけ送れば良かった時代に、彼女は計量的心理テスト、数学、論理という3つの面接を受けました。その後、彼女は他の有望な候補者たち全員と共に2週間のクルーズに送られました。船上での面接が終わる頃、クルーズ船での生活に彼女は「すっかり魅了」されていました。当初は1年だけの航海の予定でしたが、9年後、彼女はマスター（船長）の証書を受け取っています。彼女は法律を学ぶために航海の仕事に終止符を打ち、海と法律の世界両方の長所を組み合わせられる海事の法律家になることに胸を躍らせています。

彼女は船員や若い訓練生を指導していますが、海上で働く女性の数が増えていないことを嘆いています。

女性にとって海上での生活は厳しく、時に男性乗組員よりも厳しい基準で評価されることがあります。「女性の弱点ばかりが誇張されていて、長所がないがしろにされています」。また、文化的な問題から、乗組員の一部は女性からの命令に応じることが難しい面があります。彼女は今でも船の操縦を恋しく思っています。彼女は、難所であるシンガポール海峡の航行や、見張りの励行について、また世界を旅したことについて陽気に語っていました。船上での仕事はおとぎ話ではなく、誰にでもとはいかなくとも、船上での人生を選んだ人々にとって素晴らしい冒険であるということを、彼女との会話が私に教えてくれました。

最後に、インド人船長であるラディカ・メノン氏が海洋における勇敢な行為で「IMO 勇敢賞」を受賞した話で今回の記事を締めくくります。私は、幸運にも彼女がメダルを授与される場面に聴衆として参加することができました。彼女は謙虚でありながら明晰で自信にあふれ、その姿をIMO で見た私は、自分がインド人であり女性であることを誇りに思いました。

メノン船長は、2012年にインド人女性として初の船長になりました。彼女は、エンジンの故障で嵐の中を漂流していた漁船を救助し、15歳の少年を含む7人の漁師の命を救ったことで「IMO 勇敢賞」を受賞しました。漁師たちは食糧を流され、氷上で1週間耐え続けていました。25フィートの波と大雨の中、漁師の救助を命じた当時、彼女は石油タンカーの船長を務めていました。彼女はIMO で、勇敢な行いは彼女だけで行ったのではなく、彼女の乗組員たちにもその勇敢な行動に称賛が送られるべきだと述べ、また、同じ状況であれば誰でも自分と同じ行動を取っていただろうと繰り返し述べました。

彼女は様々なインタビューで、ある日「女性のいない土地」で冒険していた女性が、翌日には開拓者になると話しています。そして今日、女性にとってシャドウキャリア（他人の影武者のような仕事）といったものは一切ありません。それらは今や単なるキャリアに過ぎないのです。メノン船長は国際的な船員財団を通じて海運業界の女性たちを指導し、彼女たちの航海のキャリアを促進・支援しています。また、より多くの女性に海運業の門戸を開放したいとメノン船長は考えています。

私は、父の足跡をたどって船長になることはありませんでしたが、あらゆる体格、姿、肌の色、性別の船長が存在し、彼らがありのままの自分で、あらゆる障壁を突破していく誇らしい姿を目撃できる時代に生きていることを非常に嬉しく思います。「見えていなければ体現することはできない」という言葉があります。現代の少女たちは、何のためらいを持つことなく船長として外洋を航海するという夢に突き進んで行くことでしょう。

本情報は一般的な情報提供のみを目的としています。発行時において提供する情報の正確性および品質の保証には細心の注意を払っていますが、Gard は本情報に依拠することによって生じるいかなる種類の損失または損害に対して一切の責任を負いません。

本情報は日本のメンバー、クライアントおよびその他の利害関係者に対するサービスの一環として、ガードジャパン株式会社により英文から和文に翻訳されております。翻訳の正確性については十分な注意をしておりますが、翻訳された和文は参考上のものであり、すべての点において原文である英文の完全な翻訳であることを証するものではありません。したがって、ガードジャパン株式会社は、原文との内容の不一致については、一切責任を負いません。翻訳文についてご不明な点などありましたらガードジャパン株式会社までご連絡ください。